

「このワークショップを経ると、
階段の様な成長ではなく、
ワープの様な成長や変化が起こるんです。」



「弊社の新入社員は短いタイムスパンでの成長を目標として課せられています。
いかに本質に早く気づき、自分の壁を突破し、成長していくかというスパンを
短くする方法に重点を置いています。」

◆ 導入事例: マース ジャパン リミテッド 様

マース リーダーシップ プログラムと呼ばれる新卒育成期間をトータルで捉え、従来の「Doing」(やり方やスキルなど)ではなく、「Being」(あり方や人間性など)を開発していく様々なオリジナルプログラムを導入していただきました。その全容を、マース ジャパン リミテッド 人事部の方々に詳しくお話を伺いました。



マース ジャパン リミテッドについて

ー マース ジャパン リミテッドの業態について教えてください

マース ジャパン リミテッドは、米国 マース イン コーポレイテッドの日本の拠点として 1976 年に設立されました。現在、マースがグローバルで展開するペットケア、チョコレート、食品など 6 事業のうち、ペットケア製品、スナック菓子製品、ドリンク製品の 3 つの分野で計 12 ブランドを展開しています。

マースは世界的なブランドの数々を創り上げてきた企業の一つで、非上場企業でありながら年商 300 億ドル以上を計上しています。この成功の基盤にあるのは資金力だけではなく、たゆまぬ創造力と流行に対する鋭い直感です。これらが 100 年にわたってマースのビジネスを一步一步前進させてきたのです。

ー 新卒育成プログラム「マース リーダーシップ プログラム」について教えてください

「マース リーダーシップ プログラム」とは、グローバルな舞台で経営の中核を担えるリーダー（以下、MLP）を早期に育成するために作られた、新卒社員向けの育成プログラムです。少数先鋭で入ってくる新卒入社の方は全員 MLP でキャリアをスタートします。このプログラムは、通常考えられているスピードとは異なる次元で、リーダーとして成長することを目指すものです。

プログラムでは、自分の能力を越えるレベルの仕事の挑戦や、過去の成功体験だけでは乗り越えられない課題が待っています。厳しいフィードバックや光が見えない困難な壁に直面することもあります。しかし、どんな状況においても、主体者としてリーダーシップを発揮し、自分ならではの新しい価値を生み続けること。プログラム参加者への期待はここに 있습니다。

> 続きをご覧になりたい方は、こちらからお問い合わせください。

MLPの育成のコンセプトは?

ー 全体を通したコンセプトなどがあれば教えてください。

新入社員が会社に入ってきて圧倒的に足りないと感じるのは、内省力と思考力です。

若い時に与えられる仕事は意外と、思考力が鍛えられる場が多くありません。徹底的に考え抜く必要がある仕事はそこまでなくて、どちらかと言うとやり方を体を使って覚えて行くということが多いのではないのでしょうか。

入社1年目はそれでもいいのではないかと、という話もあるのですが、今と昔は新人の置かれている状況や環境は違います。最近の新人達を見ていて思うのですが、「その仕事をやることにどのような意味や意義があるか」を重視する人が多く、意味をきちんと満たせないと不満を抱えてしまいます。

しかし、その不満が表層化しないので、我々にはなかなか見えません。従って、表向きは何も問題ないかのようにしっかりと仕事をするので、分からずに放っておくと、やる気を無くしていくか、離職を考え始める、ということが起きてしまいます。

ー どんなワークショップを探していましたか？

こんな状況に置かれているので、自分で学習して成長していける筋肉を早いうちから付けてあげるしか方法が無いと思っていました。

弊社の新入社員は短いタイムスパンでの成長を目標として課せられています。早く成長するためには、どれだけやってきた事から学び取れるか、その力に比例します。誰でも時間をかけ、体験を通じ、失敗の痛みを共に感じれば学び取れることですが、それをいかに本質に早く気づき、自分の壁を突破し、そこからの学びを活かして成長していけるか、このスパンを短くすることに重点を置いています。この点がレバレッジだと思っているので、内省することや、深く考えるというワークショップを2008年から今に至るまで、入社後の早い段階で入れてきました。

今の新入社員はとても優秀なので、効率よく仕事をこなすのですが、自分で考えずに仕事を表層的に進めているのが見受けられました。そうすると、仕事の本質的な面白さに気づけないし、成長スピードも遅くなってしまいます。従って、ワークショップを通じて、仕事の本質にせまったり、自分ごととして仕事を捉えられる様な時間を持つことが出来ればと思っていました。

インタビューを最後までご覧になりたい場合は
ウェブサイトよりお問い合わせ下さい